認知症高齢者ケア場面における物語世界の共同構築プロセス

－パッシング・ケアの意義に関する検討を通して－

○　長崎女子短期大学　　荒木　正平（7846）

キーワード：認知症高齢者、語り、パッシング・ケア

１．研 究 目 的

多くの先行研究にも示される通り、認知症高齢者による「語り」とそこに込められた意図は、介護者主導で一方的に解釈されるケースが多かった。介護者は、「語り」の主体としての認知症高齢者の意図を十分に汲み取ることなく、結果として、介護者自身の望む現実認識を認知症高齢者にも強制することになってしまいがちである。介護者が、認知症患者の「語り」を恣意的に解釈することで、そこには、「語り」の本来の主体であるはずの患者らが抱いた意思とは異なった意味が付与されることとなる。その結果、認知症高齢者の意思が十分配慮されているとは言い難い状況が発生する。

認知症高齢者の意思を理解することには、大変な困難を伴うことがしばしばある。また多くの介護現場は、非常に多忙であることも理解できるが、認知症高齢者の「語り」とそこに込められた思いとが､介護者によってあまりに軽く取り扱われることは､結果として、認知症高齢者の QOL を低下させていることもまた確かである。本研究ではこのような問題意識から、認知症高齢者の意思を理解するという営み自体のもつ意味について、認知症高齢者を介護する者の「語り」の分析を通して明らかにすることを目的に考察を進めた。

２．研究の視点および方法

介護現場のコミュニケーション場面で広く用いられるテクニックに、パッシング・ケアと呼ばれるものがある。パッシング・ケアとは、Goffman によるパッシング（passing）概念をもとに構想された用語である。認知症高齢者の症状に気づいている周囲の支援者らが、まるで本人が認知症などではないものとしてふるまう関係形成上のテクニックであるとされ、認知症高齢者への「配慮のケア」としてなされることが多い（出口,2004）。しかし介護者主導による―おそらくは善意に基づく―関係の文脈形成過程においてこそ、介護者には、より慎重な言動と反省的なまなざしを、常に自らに課すことが求められる（荒木,2007）。本研究においては、複数の介護経験者（施設職員等）にインタビューを行い、彼らの「語り」を文書化し分析に用いた。介護者の「語り」に現れる、パッシング・ケアの活用に関する（介護者ごとに様々に異なる）意識のあり方についての詳細な分析から、介護場面に関わる関係者間のミクロな政治性に関する考察を試みた。

３．倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会の倫理委員会規定及び倫理指針に基づき適切に遂行された。

４．研 究 結 果

本研究における介護者の「語り」の分析から、認知症高齢者による「語り」が、患者本人の意思は置き去りのまま、介護者／支援者主導といった形で、一方的かつ恣意的に解釈される状況の存在が改めて確認された。周囲の介護者／支援者による恣意的な解釈が支配的なものとなるに至る背景には、他に選択肢がなく、そうせざるを得ないという介護現場の厳しい状況があることは事実である。そこでは、パッシング・ケアの手法が、「認知症高齢者を傷つけない」ために、という介護者主導の解釈を正当化する文脈の形成に用いられていることもまた確認された。つまり、認知症患者が自らの意思を他者に「理解させる」ことができないため、健常者である我々が「理解してあげなければならない」という暗黙の認識が、介護者‐被介護者関係の前提として存在しているということである。健常者／認知症高齢者間にある、このような強者／弱者の線引きについては、ほかならぬ認知症高齢者自身のうちにも存在している。認知症高齢者とは、強者／弱者の線引きの狭間におかれ、今まさに変容しつつある自己といかに対峙しうるか、という非常に困難な状況におかれた存在としても把握可能であることが示唆された。

5. 考 察

パッシング・ケアという手法を用いたコミュニケーションの検討過程において浮上する問題、すなわち認知症高齢者の「意思」が形成される過程に、介護者はいかに関わり、〈介入〉するべきか（あるいは、〈介入〉しうるか）が、本研究での主たる検討事項であった。ここでは介護者による「語り」を文書化したものを主たる資料にして分析を進めたが、結果的に、認知症患者と介護者との関わりの場面におけるパッシング・ケアとの距離感は各主体ごとに多様であり、また同時に、各人のなかでもそのスタンスの取り方は常に一定ではなく揺れ動いていることが明らかとなった。そのことから、認知症高齢者ケアの場面において共同で構築される物語世界が、変容可能性に満ちたものであると指摘できる。

分析を進める過程で、「認知症高齢者の意思の理解」という営為を、彼ら＝理解される側（“健常ではない認知症高齢者”）と、我々＝理解する側（“健常者である人々”）という、十分な根拠を欠いた二分法を前提としつつ論じることの暴力性の存在が示唆された。それはすなわち、健常者／認知症高齢者という線引き自体を問い直すことの必要性を示している。これまで、彼ら（＝認知症高齢者）の意思が、我々（＝健常者）のあり方と関わりなく独立して存在する対象物であると把握されていたことによって、認知症高齢者をめぐる関係構築の実践については、極端に限定的な語られ方に支配されてきた。認知症高齢者をめぐる「語り」を根底から問い直すことで、彼らをめぐる世界が本来有する豊かさに開かれていくことが今後ますます必要となる。